リ本校児童九名ノ尊キ生命ヲ失ヒ(1)〈各家庭ニ於テ〉タルハ悲惨ナリ。

63〔京都女子学園五十周年小史〕

昭和二十年一月十六日、時刻ははっきりしないのですが、かなりふけていたのでしょう。米機が編隊で、南西から北東に向って飛んでいく爆音を、床の中でうつらうつらしながら聞いていたように思います。すると急に耳もとで途方もない大きな爆音が響いたなと感じたとたんに目がさめ、反射的に起き上がりました。すると、冷たい風が部屋中に流れこんで、カーテンや釘にぶら下げた衣類をかなり強く吹き動かしているのに気がつきました。不思議に思ってすかして見ると、締めたはずの西側の窓が開けっ放しになり、そこから北西の風が吹きこんでいました。急いで着替えをしようとすると、かなり重いガラス障子が二枚桟だけになって夜具の上にのっていました。部屋中には微塵になったガラスの破片が、散らかっているようです。「これはただごとではない」と暗やみの中を手さぐりで階下へ下り身じたくをととのえ、宿主の原先生と一緒に学校へかけつけました。宿直員・使丁を起して校内・錦華寮の巡視をやって何事もなかったので、一安心して使丁室へ引き上げたところへ、「馬町へ爆弾がおとされた」「市田—通用門前の果物屋—が火事だ」「どこの家がつぶれた」「どこのじいさんがふとんの中でねたまま死んでいる」等々いろんな情報が入ってきました。原先生と相談して、本山へ連絡をとり、情況報告をしている所へ、金子先生があわただしくこられて「第三小松がやられて、寮生が下敷きになっている。」と告げられたので、さらに本山へ電話して現場へかけました。そこでは、もう警防団員や寮生が、見えない寮友の救い出しに必死のはたらきをしてくれていました。私らも、うずたかく積まれた柱・壁土・板片・瓦などのとりのけを懸命に続けました。だれかが、「この下で声がきこえる。」と叫びました。期せずしてみんなはそこに集まり、無事であることを念じつつ、折り重なった邪魔物をとりのけていきました。「いた、いた。」——だれかの声のした方を見ると、頭からすっかり壁土を浴びた一寮生が

背中をまるくし、はいつくばうようなかっこうで現われました。寮友は泣きながら夢中でかけ寄り、抱きかかえるようにして静かに立たせました。「よかったねえ」と先生方ものぞきこむようにしていたわりました。相当心うたれたようでしたが、外傷はかすり傷程度だったのでほっとしました。寮の各室の間取りが大変狭く、そこへ机、書棚そのほかの小道具類がおかれてあるので、こんな場合天井が落ちても直接下に落ちないで、何かにささえられて、すきまが生じた事も結果としてよかったのでしょう。何しろ一瞬のことで逃げることもできなかったのですが、一人の犠牲者もなかったことは仏祖加護のお力であり、不幸中の幸いといわねばなりません。本山からは執行長をしておられた朝倉先生も、深夜のことでしたが役員を連れてかけつけられましたので、小松寮の作業が一段落のあと、学校へ引き上げ使丁室で朝倉先生を囲んで、善後策について話し合いました。

馬町方面の被災の程度、被災者数などは発表されなかったのでわかりませんが、馬町通用門前の狭い通路を境として東の方、特に南側は見渡す限り、家という家は全壊でしたが、使った爆弾が、焼夷弾でなく当時モロトフのパンくずといわれた小型のもので、全焼から免れることができたようです。(1)

(1)この空襲では上馬町・下馬町を中心に、三百十六戸が罹災、四十一名がなくなった。(2)元高等女学校教員岡本隆雄の回想。

寺院と史跡

妙法院の沿革。

64〔京都府寺誌稿〕

創立由緒並沿革

本寺ハ本ト叡山三千坊ノ一ナリ。伝教大師、慈覚大師、恵亮和尚ヨリ承継シテ叡山ニ在リシガ、後白川法皇仏教ニ御帰依深ク、嘉応元年六月十七日薙髪、行真ト法号シ、大ニ法住寺ヲ造修シ、此ニ宸居ヲ定メラル。此ヨリ先キ法皇日吉社ヲ御崇信アルヲ以テ、新ニ法住寺ノ東ニ日吉社ヲ勧請シ、新日吉ト号シ多ク社領ヲ寄附シ、日常ノ参拝ニ便ニセラル。此時昌雲僧正、法皇ノ